

没理想論争注釈稿（十二）

坂井健

〔抄録〕

森鷗外と坪内逍遙による、近代文学史上最大の論争といわれる「没理想論争」についての注釈のうち、逍遙の鷗外への反論である「其意は違へり」についての注釈。「没理想論争」については、さまざまに論じられてきたが、そうした論が細部の読みの共通理解の上でなされているかという点、必ずしもそうとはいえず、ややもすれば机上の空論になりかねない現状がある。また、注釈についても、これまでは語釈レベルにとどまり、視点も個別作家の文学論としての見方に限定されがちであった。そこで、本稿では、

語句の注釈から出発して、解釈にまで踏み込み、両者の文学論争を総合的に捉えることを第一の目的とする。さらに時代を代表する両者の論争を通して、当時の文学思潮を探り、論争の文学史に対する影響についても考察を試み、「没理想論争」を、文学史の中で新たに位置づけすることを第二の目的とする。

キーワード 没理想、森鷗外、坪内逍遙

其意は違へり^①

鷗外漁史の曰はく「主観の情を卑みて客観の相を尊む。これを『早稲田文学』が没理想を説きて戯曲を嗜む所以とす。われは其の意を取りて其の言を取らず。没理想は没理想にあらずして没主観なればな

り。」^②と。答へて曰はく、あらず。漁史の言は戯曲論としては是ならんが、その没理想を解釈する意はたがへり。わが謂ふ没理想は戯曲を嗜む所以の全理由にあらずして、纒かにその一理由たるに過ぎざればなり。^③かるが故に、われは漁史の言に服するも、其の意は違へりといふ。

(1) 其意は違へり・『早稲田文学』一〇号(明治二五年二月二九日)「時文評論 欄、烏有先生に答ふ(其三)」の直後に掲載されている。したがって、これまでの注釈では取り上げられなかったが、『烏有先生に答ふ』の補遺と見てよい。内容的には、『柵草紙』二七号(明治二四年二月二五日)巻頭の鷗外論文『山房論文 早稲田文学の没理想』の直後に、『山房論文付録其七』として掲載されている。「其言を取らず」への反論となっている。これに対応する形で書かれたため、「其言を取らず」と同様、「烏有先生へ答ふ」とは別立てにされたものと考えられる。題名の由来は、以下に再三現れる「其の意は違へり」による。鷗外が逍遙の戯曲論の立場には同意するが、「没理想」という逍遙の術語は取らない、という意味で「其意を取りて其言を取らず」といったのを逆手に受けて、鷗外が戯曲について述べた「言」には同意するが、「没理想」を解釈した「意」は違っていると反論したものの。

(2) 曰はく・初出「曰く」。以下この異同は記さない。なお、初出との異同は、他に句読点などあるが、句読点については、解釈に関わるもののみ記す。

(3) 「主観の情を専みて客観の相を尊む。……没理想は没理想にあらずして没主観なればなり。」と。「其の意」は初出「其意」。これは題名以外は一貫している。以下、この異同については記さない。括弧内は「其言を取らず」の引用。以下すべて同様。文学作品に現れた作者の(特に登場人物に対する)主観的な感情を排して、客観的な作品のありようを尊重するが故に、逍遙は、「没理想」を説いて戯曲を好むという。その考え方には賛成だが、そのような作品を「没理想」と表現するのはおかしい。なぜかという点、逍遙の言っている「没理想」は作者の理想が現れていないのではなくて、作者の主観が現れていないありさまをいつているからだ。だから、逍遙のいう「没理想」は「没主観」なのだ。以上のような鷗外の反論を引いたもの。

(4) 漁史の言は戯曲論としては是ならんが、その没理想を解釈する意はたがへり。わが謂ふ没理想は戯曲を嗜む所以の全理由にあらずして、纒かにその一理由たるに過ぎざればなり・初出「言」、「意」、「全」、

「一」に黒丸点。戯曲は、作者の主観が現れない「没主観」となりやすい、という鷗外の意見には賛成だが、「没理想」は「没主観」だとする鷗外の解釈には従えない。なぜかという点、自分の説く「没理想」は、戯曲をよしとするすべての理由ではなくて、ほんの一つの理由に過ぎないのだ、の意。逍遙は、『烏有先生に答ふ(三)』でシェークスピアと近松とは、没理想という点で似ているが、戯曲家としての技量が同じだとは考えていない、といった意味のことを述べており、一応は没理想のみが戯曲の価値を計る尺度ではない、という態度は示している。

鷗外漁史の曰はく「馬琴が筆力能く暮六を写せるに、猶ほ評を叙事の間に挿むことを免れざりしは、婦幼のために書を著すといふ志しの卑しきが為なり。」⁽¹⁾『早稲田文学』が『八犬伝』にあきたらざる所ありとするは、豈に馬琴が叙事の間に評を挿みしを以てならずや。われは其の意を取りて其の言を取らず。没理想は没理想にあらずして没挿評なればなり」と。答へて曰はく、あらず。漁史が言は馬琴の評としては是ならんが、その没理想を解釈する意は違へり。われは未だ没挿評即没理想ともいはざれば、また自評をだに除き去らば、『八犬伝』即没理想詩ともいはざればなり。⁽²⁾われは漁史が言に服するも、その没理想に於ける意は違へりといはん。⁽³⁾

(1) 馬琴が筆力能く暮六を写せるに、猶ほ評を叙事の間に挿むことを免れざりしは、婦幼のために書を著すといふ志しの卑しきが為なり。・「志し」、初出「志」。馬琴が『八犬伝』の暮六の人物描写の際に、登場人物の行動や性格などについて評価を挟みながら物語を進めていったのは、勸善懲惡主義的な文字観を持っていたためであり、そのために作

品の質が落ちているということ。人物評が作品の中に現れることは、作者が作品の中に顔を出すことであり、作者の考えがあらわになるから、読者は虚心に作品を受容することができない、という考えに基づく。次の「豈に馬琴が叙事の間に評を挿みしを以てならずや。」に続く。

(2) 漁史が言は馬琴の評としては是ならんが、その没理想を解釈する意は違へり。・初出「言」、「意」に黒丸点。

(3) 末だ・初出「未だ」。底本逍遙選集の誤植。

(4) 自評をだに除き去らば、「八犬伝」即没理想詩ともいはずればなり。

・逍遙のいう没理想とは、後に「作者の理想―極致とする意見―の見れざるをいへばなり」とあるように、作者のよしとする人生観が表に出ていないことである。登場人物についての評価を差し控えたところで、物語全体に人生観が現れていれば、それは没理想とはいえないことになる。

鷗外漁史の曰はく「シェークスピアの作の造化に似たるは、曲中の人物、一々無意識界より生れいでて、おの／＼其の個想を具へたればなり^①。その作の自然に似たるは作者の才、様に依りて胡蘆を画く世の類想家に立ち越えたりければなり。『早稲田文学』は是れに縁りて、シェークスピアを没理想なりとす。われは其の意を取りて其の言を取らず。没理想は没理想にあらずして没理想なればなり」と。答へて曰はく、あらず。漁史の言はシェークスピアの評としては是ならんが、その没理想を解釈する意はたがへり^③。わが所謂没理想は、没理想にはあらずして、作者の理想―極致とする意見―の見れざるをいへばなり。漁史がシェークスピアを評して没理想の作家なりといふ。其の言はまことに妙なり。審美に甚深の学者ならで、誰れかは此の如き妥当名目を作らん。われ深く其の言の佳なるを悦ぶ。されど、其の没理想を解

釈する意は違へり。

(1) シェークスピアの作の造化に似たるは、曲中の人物、一々無意識界より生れいでて、おの／＼其の個想を具へたればなり。・自然が無限かつ多様で、個々の事物が一つ一つ個性をもつて生き生きとしているのは、無意識から生まれたものであるという前提に立ち、シェークスピアの作品が優れているのは、戯曲中の人物が無意識から生れ、一人一人個性をもつて生き生きとしているからだ、の意。

(2) 様に依りて胡蘆を画く世の類想家・類型化された形でひょうたんを描く画家。いわゆる俳画のようなものを思い浮かべると良いだろう。

(3) 漁史の言はシェークスピアの評としては是ならんが、その没理想を解釈する意はたがへり。・「漁史の言」は、初出「漁史が言」。「言」、「意」に黒丸点。

(4) 作者の理想―極致とする意見―・初出「作者の理想（極致）。前述したように、作者がよしとする人生観のこと。

鷗外漁史の曰はく「悟は大道なり、学は迂路なり。まことや、成心は悟の道の稲麻竹園^①にして、学の道の荊棘なれば、誰れかは是れを破り、これを除かむことを欲せざらむ。然りとて、理を談ずるを聞くことをだに能はざる世の味者に、成心あらせじと願ひて、唯々^②実を記したるのみを見て悟れといはんは、おそらくは難題ならん。『早稲田文学』が大道を説くは善し、われ豈に其の意を取らざらんや。されど、其の言は即ち我が取らざる所なり。故いかにといふに、『早稲田文学』は読者の没理想を命にして言を立てつれど、所謂没理想は没理想にあらずして、没成心なればなり」と。

(1) 稲麻竹園・稲麻竹葦の誤。鷗外の「早稲田文学の没理想」(『柵草紙』二七号、明治二四年一月)では、「稲麻竹園」、のちの『月草』では、「葦」となっている。法華経の中の語。稲、麻、竹、葦が群がって入り乱れるようす。ここでは、成心すなわち先入観が入り乱れて、悟りを妨げることをいう。

(2) 唯々・初出「唯」。

答へて曰はく、あらず。漁史が没成心の言論^①は、いと高しといへども、その没理想と記実との関係を解釈する意はたがへり。われいまだ「時文評論」を読まん人に向かひて、頓悟せよと命じつることも無ければ、直ちに帰納せよといひつることも無く、はた読者の没理想を命じつることもなければなり^③。かるが故に、われは漁史の言に服して、其の意を違へりといふ。

(1) 言論・初出黒丸点。

(2) 意・初出黒丸点。

(3) われいまだ「時文評論」を読まん人に向かひて、頓悟せよと命じつることも無ければ、直ちに帰納せよといひつることも無く、はた読者の没理想を命じつることもなければなり。・「時文評論」はその折々の文学評論の意の普通名詞であるが、当時の文学雑誌には大抵設けられていた。ここでは『早稲田文学』の文芸評論欄を指す。なお、逍遙は、「我れにあらざして汝にあり」(『早稲田文学』三号、明治二四年一月)で「読者よ、時文評論」の第何十頁に明治文学の活機が現れたるかと詰問することを休めよ。活機の在否は我が評論の紙上にあらずして汝が公平なる眼中にあるべし。「時文評論」の第何篇に、明治文学大婦一、大調和の策あるぞと問ふこと勿れ。其の大婦一の無上の良策は、我が文章の上にあらずして、汝が没理想の心中にこそあるべけれ。」といつており、鷗外の批判はこれを受けている。

漁史は方今の文壇に於ける審美学者の泰斗たり。われは漁史の教へによりて、益を得つること已にあまた、びに及びぬ^①。われは漁史の説に服せずといはんや。然れども、ひとり没理想に対する漁史が解は、われいまだ服する能はず。造語の不穩なるに因るといへども、所謂没理想を解釈するに当りては、漁史の意とわが意と相背けばなり。

(1) われは漁史の教へによりて、益を得つること已にあまた、びに及びぬ。・「教へ」は初出「教」。逍遙は「烏有先生に謝す」(『早稲田文学』七号、明治二五年一月一日)、「没理想の語義を弁ず」(『早稲田文学』八号、明治二五年一月三〇日)において、自己の「没理想」という術語の定義、用い方が不適切であったと認めて、訂正しているが、これをを指す。

われ已に烏有先生に答へて、没理想の方便にして、わが目的にはあらざる由をことわり^①、ドラマを評判する語としても、そが全相を評したるにはあらで、わづかに一相を指したるなりと弁じき^②。かるが故に、には唯々^③漁史とわれと、其の意の相違へる所以をいふ。

(1) われ已に烏有先生に答へて、没理想の方便にして、わが目的にはあらざる由をことわり・逍遙は「烏有先生に謝す」においてすでに「没理想は方便のみ、目的にあらず。」と述べているが、直後の記述と対になつていふことから、ここでは主に「烏有先生に答ふ」の中の説明を指していると思われる。「烏有先生に答ふ」の中で逍遙は、先入観に満ち満ちた明治の批評家たちを戒め、先入観を無くすためのきつかけを作るための手段として没理想の評論を心がけるのだ、といった意味のことを述べている。

(2) ドラマを評判する語としても、それが全相を評したるにはあらず、わづかに一相を指したるなりと弁じき。・「語」は、初出「詞」。「鳥有先生に答ふ」の中で、戯曲を批評する場合にしても、そのすべての点についていったものでなく、作者の人生観について述べたものである、といった意味のことを述べている。前の「わが謂ふ没理想は戯曲を嗜む所以の全理由にあらずして、纔かにその一理由たるに過ぎざればなり。」と同様。

(3) 唯々・初出「唯」。

(4) 其の意の・初出「其意」。

(さかい たけし 日本語日本文学科)

二〇〇一年十月十七日受理